足利市あがた駅南遺跡出土の縄紋土器補足報告 1

江原（えはら）　英（えい）

はじめに
Ⅰ．住居跡出土土器
Ⅱ．土坑出土土器
小結

足利市あがた駅南遺跡出土の縄紋土器について追加報告する。今回は、KL 区の遺構出土土器を主に提示する。

はじめに

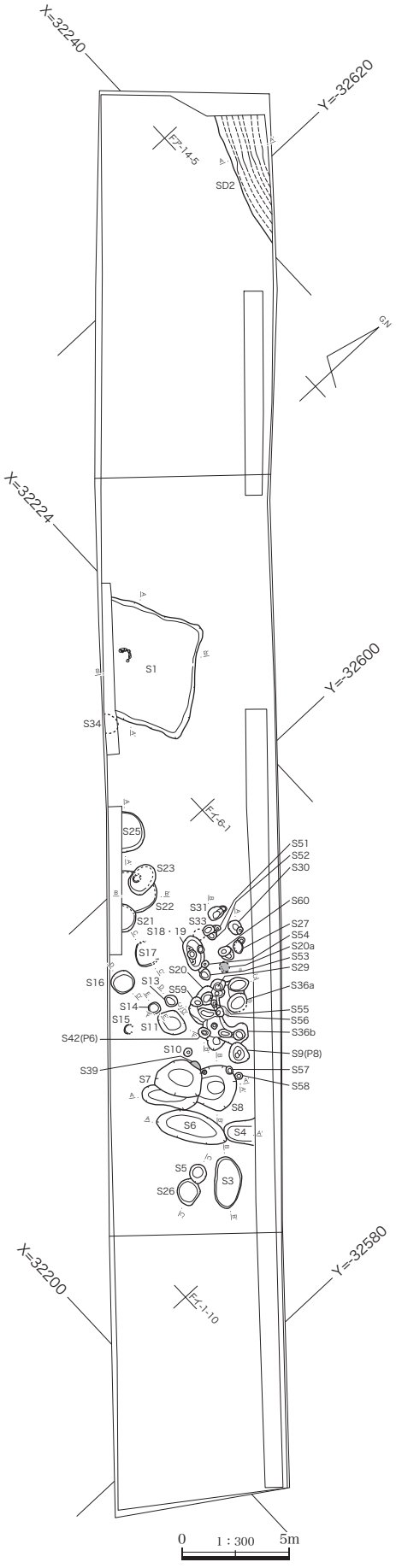
足利市あがた駅南遺跡の西地区で確認された縄紋時代後晩期の集落跡からは収納箱 1,200 箱と多量の遺物が出土した。北関東縄紋後晩期社会を考える上で、また遺跡の評価を検討する上でも注目すべき資料は多く、とりわけ多く出土した縄紋土器については、整理報告に際して、全点（約 25 万点）の確認と大まかな分類は行い得たものの、図化資料の選択に際しては極めて限定せざるを得ず、遺跡の土器様相を示す上での問題も残された。特にＫＬ区と呼称した集落中心～南西部の資料については、整理の最終段階で分類・接合等の整理を行ったこともあり、極めて不十分な報告となった。今回は報告書に掲載し得なかった縄紋土器の内、このＫＬ区の遺構出土土器を主に追加報告する。この中には遺構内の出土位置を記録したドット取り上げの遺物もあるが、出土位置記録の確認は行い得ておらず、ここでは注記に示された取り上げ№のみ示しておく。

Ⅰ．住居跡出土土器

ＫＬ区の住居跡として、竪穴の掘り込みが明瞭でＫＬ区の中央西寄りの位置で確認されたＳ１と、ＫＬ区の中央東寄りの位置で確認されピット群の配置から推定したＳ 70 ピット群とがある（第 1 図）。ここではＳ１出土土器を示す。Ｓ 70 ピット群についてはそれぞれのピットに対してＰ○或いはＳ○との番号を付しており、土坑・ピット出土土器を示すⅡの項目中で扱う。

第２図にＳ１住居跡出土土器を示す。Ｓ１出土資料については、既に報告書第 369, 370 図に示しているが、今回図化候補資料の中から若干の補足報告をする。

1 は安行系深鉢または鉢の口縁部で沈線→縄紋ＬＲ→無文部ミガキの順で文様が描かれる。口縁端部は刺突が廻ることで小波状を呈しているが、特に右端の突起がやや大きめである。胎土には白色粒を多く、雲母を少量含み、色調は褐灰色を呈する。Ｓ１床下Ａとの注記がある。2 は大洞式系の鉢口縁部で、やや浅い沈線→刺突→ミガキにより文様が描かれる。器面の荒れ・摩滅もあるがミガキは明瞭では無く、文様も典型的な羊歯状文とはやや異なる。口縁端部の刻みはかなり深く、Ｖ字状の切り込み・抉りを連続させるような刺突である。内面はナデ～やや粗いミガキ調整。胎土中の鉱物は少なく、白色粒・黒色粒を少量含む。色調は内外面ともにぶい黄燈色（10YR6/3）で、かなり白っぽい印象を受ける。Ｓ１,5 層との注記がある。3 は鉢の口縁部で、比較的丁寧な作りの土器である。やや深めの施文による沈線→縄紋ＬＲ→無文部ミガキの順で描かれる。内面もヘラ状工具による丁寧なミガキ。突起を含め口縁端部も良く磨かれている。全体に胎土中の鉱物は少ないが、白色粒及び雲母を少量含む。丁寧な作りではあるが、浮彫的表現ではなく、質感等から

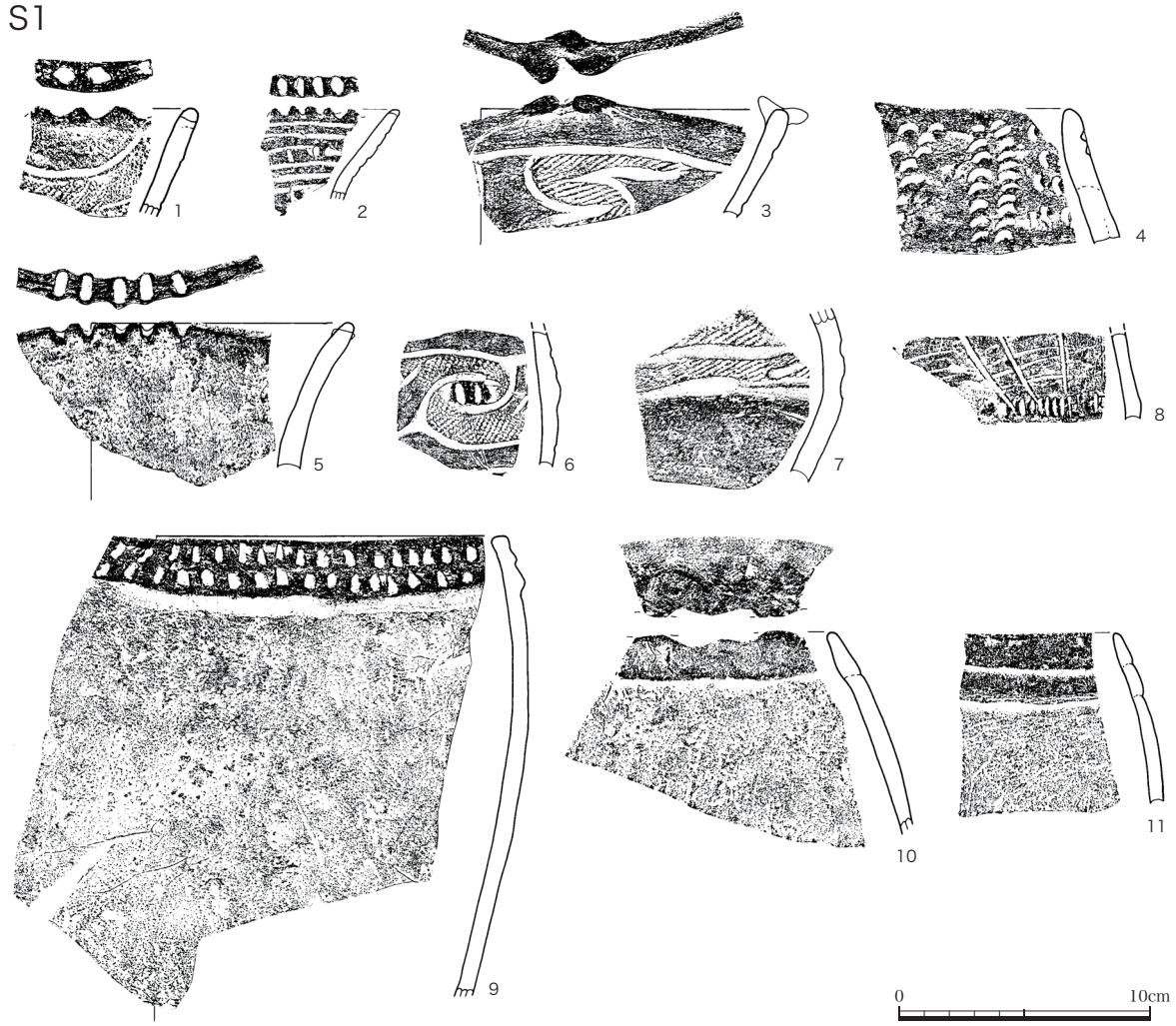


第 1 図　K・L 区全体図

も大洞系との判断を躊躇させる。色調は外面にぶい褐色（7.5YR5/4）、内面褐灰色（7.5YR4/1）を呈する。4 は厚手で大きめの深鉢と推定される土器口縁部で、粗いナデ調整後爪形状のやや深い刺突が施されるものである。刺突は縦位や斜方向に連続的に描かれており、意匠表現かと思われるが、全体のモチーフは不詳である。内面は接合痕が残るやや粗いナデ調整。下端の接合痕跡からは、破片より下位の体部は薄い無文体部で、図示の遺存部分が幅広付帯部の破片とも推定できるものの断定し難い。胎土には白色粒を多く、雲母をやや多く含み、淡い灰色基調の色調を呈する。Ｓ 1 床下 B との注記がある。

5 は厚手の深鉢口縁部で口縁端部に刻み状刺突が加えられるものである。外面ケズリ～ナデ調整、内面ナデ調整で、口縁端部も良く磨かれている。外面口縁近くに炭化物の付着が認められる。胎土には白色粒・石英をやや多く含むほか、角閃石・雲母を少量含む。色調は外面黒褐色（10YR3/2）、内面にぶい褐色（7.5YR5/3）を呈する。Ｓ 1 ,5 層との注記がある。6 は安行系深鉢体部破片で、中央部分に豚鼻状突起を擁する入組文が沈線→縄紋Ｌ R →瘤貼付→刻み・丁寧な無文部ミガキの順で描かれる。内面も良く磨かれており、一部炭化物の付着も確認される。沈線はやや細めでさほど深い施文ではないが、三叉状部分は若干深く抉られている。色調はにぶい褐色で、胎土には細かい雲母を少量含む。Ｓ 1 床下 C との注記がある。7 は前浦式の体部破片で幅広の沈線→縄紋Ｌ R により文様が描かれている。体部下半の無文部も良く磨かれている。内面は丁寧なナデ調整。胎土には雲母及び白色粒をやや多く含み、色調は灰黄褐色（10YR6/2）を呈する。注記はＳ 1 №. 73 とあり、ドット取り上げ資料であるが、出土位置の確認は行っていない。8 は紐線文系粗製土器の頸部破片である。横位弧状の浅い条線→低い紐線貼付→紐線上刻み→頸部沈線（スリット）の順で描かれる。破片右端にも縦位の沈線が一部確認される。胎土には雲母を少量含み、色調は黒褐色～褐灰色を呈する。南関東で一般的な紐線文系だが、本遺跡ではさほど多くはない。

9 ～ 11 は付帯口縁の深鉢口縁部資料である。9 は、付帯部に角頭状の刺突列が 2 段に亘って加えられている。刺突後に口縁端部が水平に近く撫でられている。付帯部下端の



第２図　Ｓ１出土土器

体部との境界はナデが加えられる部分と、ほぼ貼付のままの部分とがある。体部外面は粗いナデ調整、内面はやや丁寧なナデ、一部研磨状である。胎土には白色粒・石英・灰色粒をやや多く含み、色調は燈色（外：5YR6/0、内：2.5YR6/6）を呈する。Ｓ１床下Ｄとの注記がある。10 は付帯上やや丁寧なナデ、以下の体部はケズリ～粗いナデ、内面ミガキ調整が観察される。付帯部内面（口縁直下）は指頭押捺状の痕跡も確認される。胎土には石英・白色粒をやや多く、雲母を少量含む。色調は外面にぶい黄褐色（10YR5/3）、内面灰黄褐色（10YR6/2）を呈する。Ｓ１床下Ａとの注記がある。11 は比較的薄手で丁寧な作りが窺える土器である。上段の付帯部上には指頭押捺状の痕跡が浅く残る。体部ケズリ調整、内面比較的丁寧なナデ調整である。胎土には白色粒・灰色粒を少量含むが、この種の土器としては鉱物が少ない印象を受ける。色調は外面にぶい黄褐色（10YR5/3）、内面にぶい褐色（7.5YR5/4）を呈する。Ｓ１,5 層との注記がある。

なおこれまでの記述で触れてきた遺物の注記「床下Ａ～Ｄ」については当初確認の床面より下位から出土したもので、Ａ～Ｄはその平面区分のようである。Ｓ１住居跡では炉跡が２面確認されており、「床下」として扱った遺物も下位床面出土と捉えた方が良いかもしれないが、現地での記録や所見を確認しておらず、断定し得ない。

他に図示し得なかったＳ１出土の土器では大洞ＢＣ式の頸部破片、磨消縄文が観られる安行３ｂ式、沈線のみの安行３ｃ式対応の破片等があり、量的には体部無文の付帯口縁破片が目立つ。これらの小片等も本来は図化すべきところではあるが、報告書第 369,370 図に掲示した資料と併せ、Ｓ１出土土器の様相は概ね示し得たと考えている。既報告資料では安行３ｂ～３ｃ式期の資料が主体であり、今回報告分についても概ね整合的であるが、第２図７に示した資料等、時期幅があることも認めざるを得ない。

Ⅱ．土坑・ピット出土土器

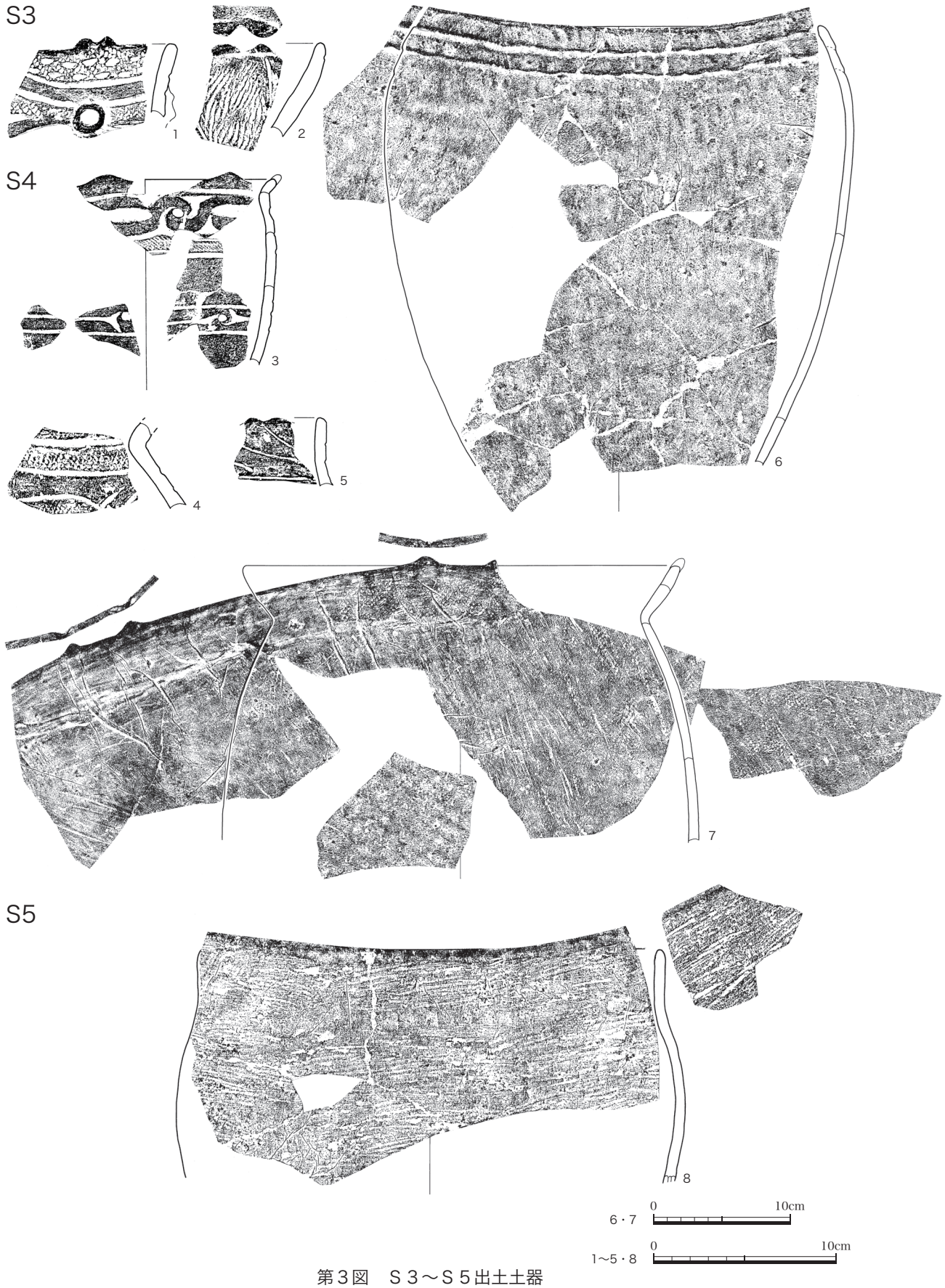
本節ではＫＬ区の土坑・ピット出土土器及び包含層出土土器の追加分を示す。

第３図にはＳ３～Ｓ５出土土器を示す。1,2 は浅い楕円形の土坑Ｓ３の出土土器である。図示資料以外では付帯口縁の土器、小形壺の無文口縁部破片等がある。1 は波状口縁深鉢と推定されるもので、沈線→縄紋ＲＬ→刺突・無文部ミガキが観察される。ミガキはかなり丁寧で、一部縄紋施紋部にも及んでいる。下端には円形で押捺が加えられる瘤が付される。内面も丁寧なミガキ調整。胎土中の鉱物は少なく、かなり黒味の強い色調を呈している。２は鉢と推定される土器で、沈線→無節Ｌ→無文部ミガキが観察されるが、文様意匠は良く分からない。1,2 とも安行３ｂ式となろうか。

３～７はＳ４出土土器である。Ｓ４は浅い楕円形と推定される土坑で、遺構は調査区外に延びている（報告書第 372 図）。図示以外にも幾つかの小片が出土している。３は小形の平縁深鉢で、沈線→縄紋ＲＬ→丁寧な無文部ミガキが観察される。口縁下の玉抱三叉文及びこの左右に配される沈線はやや深く太めの施文で、丁寧なミガキにより平滑な面となっている。一方頸部下段（体部）の玉抱三叉文はやや細く浅い線と観察される。内面も丁寧なミガキ調整で胎土中の鉱物も少ない。４は広口壺状の肩部分と推定される破片で、沈線→縄紋ＬＲ→無文部ミガキが観察される。横方向に入組三叉が連続する文様配置となろう。やや厚手で、比較的大形の土器となるかもしれない。胎土中の白色粒が多く、色調はやや赤味を帯びている（5YR2/4）。５は平縁もしくは緩い波状縁となる深鉢口縁部である。浅く細い沈線→ミガキ、内面比較的丁寧なミガキと観察される。胎土中の鉱物は少ない。６は＜Ｌ区Ｓ４№２＞との注記があるもので、幾つかの大形破片から器形復原した付帯口縁深鉢である。付帯部がやや低めで段差があまりないという特徴がある。内外面とも板状工具の痕跡も一部確認されるケズリに近いナデ調整と観察される。胎土中には石英・白色粒・灰色粒を多量に含む。色調は 10YR5/3 にぶい黄褐色、破片下端は 7.5YR5/4 を呈しているが、黒味を帯びているところもある。７は＜Ｌ区Ｓ４№１＋Ｌ区Ｓ４＋Ｋ区中５～６層＞との注記があり、Ｓ４出土破片とグリッド出土破片との接合資料である。頸部が屈曲し体部が膨らむ無文深鉢で口縁は 1/3 程度遺存している。口縁端部の突起はＢ突起状だが、間隔のある２連の小突起で、全体で４単位と推定される。外面ケズリ～ミガキ調整で部分的に浅く粗い縄紋ＬＲが加えられる。内面は一部ミガキに近いナデ調整。白色粒・雲母・角閃石をやや多く含み、色調は褐灰色を呈する。Ｓ４では他にも晩期前半と推定される磨消縄文破片が４点、他に無文口縁部破片等がある。図示した３は大洞Ｂ２式対応の土器であろうが、4,5 はじめ安行３ｂ式が主体と言えそうである。

８はＳ５出土土器で、Ｌ区Ｓ５№１との注記がある。Ｓ５は浅い円形土坑で、遺構図（報告書第 372 図）のセクションに付記した「粗製土器大型破片」はこの土器を示すようである。口縁が直立、体部がやや膨らむ無文土器で、拓影で示した以外にも破片は多くある。体部やや下方と推定される破片も観られるが、あまり接合せず図上の合成もし得なかった。やや薄手で、外面はケズリ調整、口縁端部付近～内面はナデ～ミガキ状の調整である。白色粒・石英・角閃石・チャート粒等鉱物を多く含む。

第４図にはＳ６～Ｓ９、Ｓ 11、Ｓ 15、Ｓ 17 の出土土器を示す。



第３図　Ｓ３～Ｓ５出土土器

1.2がＳ６出土である。Ｓ６はＳ４とも接する位置にある浅い楕円形の土坑である。ドット取上げ遺物の内、№1,№2はやや大きな破片だが無文の体部破片で図化し得なかった。1は鉢と推定される土器で、口縁は平縁もしくは緩い波状となろうか。沈線→縄紋ＬＲ→無文部ミガキで、意匠は入組文が描かれているようである。比較的厚手で，明るい色調を呈している（7.5YR4/6)。２＜Ｌ区Ｓ６№３＞は付帯口縁の粗製土器で、付帯部にやや深く縦長の刺突が二段付されている。体部外面はやや粗いナデ、内面は比較的丁寧なナデ調整、胎土には白色粒を多く含む。確認し得たＳ６出土土器では磨消縄文の小片が11点程あり、安行３ｂ式と比定できるものが主体である。この時期の遺構と判断できよう。

３はＳ11出土土器である。Ｓ11はＳ70ピット群の南側に位置する浅い不整円形土坑である。分類Ｂとした磨消縄文小片15点、横方向縄紋間隔施紋の破片２点、紐線文系粗製土器1点が抽出されている。型式判断可能なものは少ないが、概ね安行３ａ式～同３ｂ式の範囲内となろう。図示した３は内傾する平縁深鉢（または甕形）の口縁部で、隆起帯縄文ではあるものの、隆起が低く、無文部（ミガキは丁寧）との段差は小さい。沈線も浅く細めである。瘤上には細めの縦沈線が加えられる。安行３ａ式か。

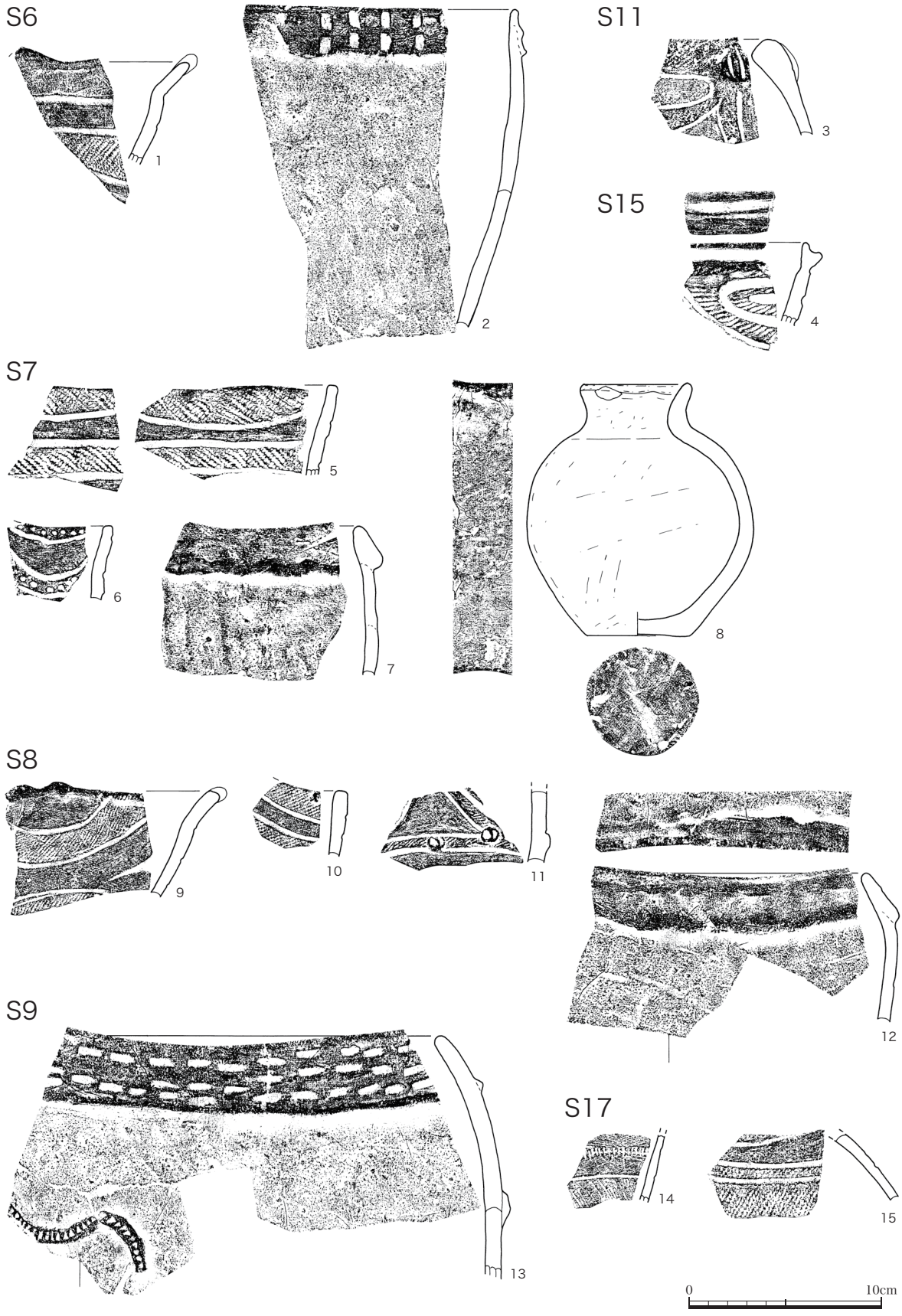
４はＳ15出土土器である。Ｓ15は記録不明な遺構で、遺構図の提示もしていない。ここで示す土器も注記はＳ15となっているが、包含層扱いとした方が良いかもしれない。やや高さのある鉢と推定され、沈線→縄紋ＬＲ０段多条または無節と観察される。口縁端部～内面のミガキは丁寧である。文様として良いか微妙だが口縁直下内面にやや幅広の凹線（沈線）が廻る。外面沈線も幅広で前浦式や「前浦式直前型式」の施文手法に近い。

第４図５～８はＳ７出土土器である。Ｓ７は不整楕円形の土坑でＳ８やＳ39（焼土跡？）とも重複してい

る。Ｓ８との関係も不明瞭な他、Ｓ７範囲内でも２基重複かのような平面記録となっており、擂鉢状の不整な断面形態も含め考え、当該期の遺構との判断も問題が残るかもしれない。土器破片はかなり多く出土しているが（357点)、平面位置を記録したドット取上げ資料は４図８の１点のみである。他の土器片も含め出土状態記録の確認は行っていない。図化候補資料として確認したＳ７出土土器では35片程度の磨消縄文の破片、無文或いは粗製土器破片10点、底部１点がある。磨消縄文破片で型式判断可能なものでは安行３ｂ式が主体的と判断される。小片で図化し得なかったが、姥山Ⅱ式系の突起部分破片、細密沈線文系の破片等も認められ、図示の資料群と概ね整合的である。

５は平縁深鉢口縁部で、沈線→縄紋ＲＬ→無文部ミガキが観察される。口縁端部及び内面のミガキも比較的丁寧である。安行３ｂ式か。６は波状縁が推定される深鉢口縁部で帯状区画内にやや浅めで垂直方向施文の刺突が充填されている。この刺突のある区画内はやや粗い調整のままで、この外側が丁寧に磨かれている。内面には炭化物が付着している。７は付帯口縁粗製土器で、付帯部がかなり厚く作られている。内外面とも粗いナデ調整で、特に外面は凹凸がかなり残っている。付帯部内外面に指頭押圧（オサエ）状の痕跡も認められる。胎土には石英を多く含む。８＜Ｌ区Ｓ７№１＞は口縁わずかに剥落欠損部がある以外完形の小形壺である。色調は場所により異なるが褐灰色基調である。胎土には白色粒・石英・灰色粒を多量に含み、中には２～５㎜の小礫も含んでいる。外面ナデ～ミガキ調整で、平滑に整えられている。内面もナデ調整。底面に凹線状の線状痕跡が認められるが、全体にミガキ調整が加えられ不鮮明になっている。

９～12がＳ８出土土器。９は鉢と推定したもので、同一個体小片１点も認められる。文様は沈線→節の細かい縄紋ＬＲ→無文部ミガキで描かれ、内面は丁寧なミガキ調整。雲母を少量含む。10は波状口縁深鉢の口縁部片で、隆起部が無く全体的に平坦である。沈線→縄紋ＬＲ→無文部ミガキで、破片右上端部分に豚鼻状



第４図　Ｓ６～Ｓ９, Ｓ11, Ｓ15, Ｓ17 出土土器

瘤の一部が確認される。11は大波状縁深鉢の頸部三角形意匠部分の破片で、沈線→隆起帯縄文上ＬＲ→豚鼻突起貼付・無文部ミガキが観察される。内面も含めミガキは比較的丁寧である。12は付帯口縁の無文土器で内外面とも凹凸が残るやや粗いナデ調整。口縁端部は平坦な押圧～カット状を呈している。図示以外にも同一個体片がある。Ｓ８は既述のようにＳ７と重複または連続的な不整円形土坑である。分類Ｂの磨消縄文破片９点、付帯口縁や無文淺鉢破片数点が観られる。磨消縄文破片は概ね安行３ａ～３ｂ式対比のものと判断される。

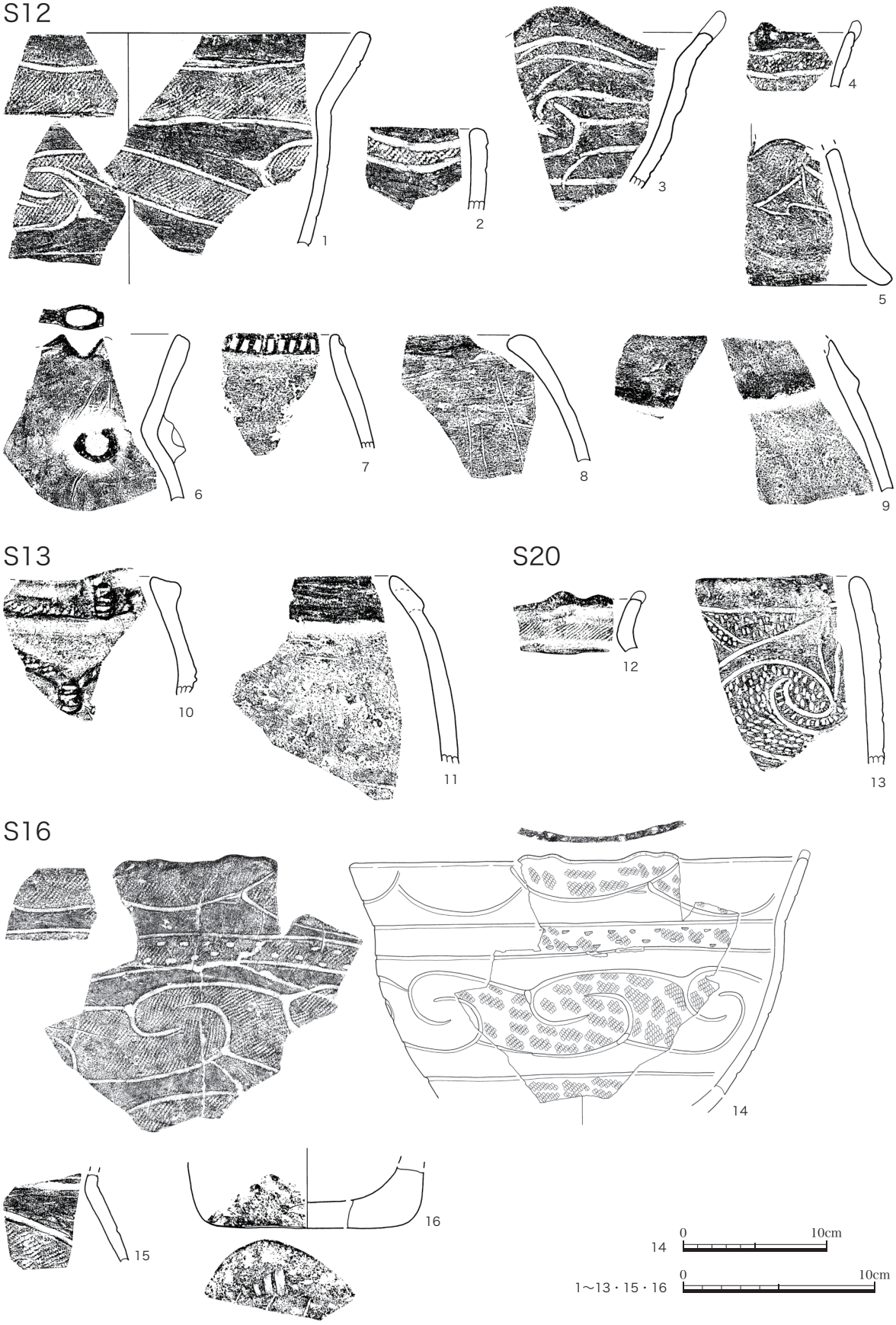
Ｓ９出土土器として13＜Ｋ区Ｓ９＋Ｌ区Ｓ９№２接合＞の粗製土器を示す。Ｓ９は小さめで浅い円形土坑である（遺構図第375図）。分類上は付帯口縁として判断し得るが、口縁に幅広く粘土帯を付す付帯口縁ではなく、口縁からやや下がった位置の頸部に隆帯を廻らし、付帯状の装飾部を作出している土器である。頸部隆帯までの口縁部には短沈線状の深めの刺突が二～三列施される。体部は凹凸の残るやや粗いナデ調整で、波状意匠？の隆帯が付される。隆体上には三角形状の刺突がやや密に加えられる。内面は比較的平滑なナデ調整。白色粒・灰色粒少量を含む胎土である。なお図示し得なかったがＳ９では磨消縄文破片３点、無文口縁部破片１点が抽出されている。前者の破片は概ね安行３ｂ式と推定できるものである点付記しておく。

第４図14，15が浅い円形土坑Ｓ17の出土土器である。14は薄手の深鉢頸部破片で、浅い条線・細密沈線→刻み･沈線→ミガキが観察される。刻みは細密沈線文系の土器にしばしば認められる細く密な刻みである。胎土中の鉱物は少ない。15は壺の肩部分と推定される破片で、沈線→縄紋ＬＲ→無文部ミガキ・沈線ナゾリが観察される。内面はやや粗いナデ調整。大洞Ｃ１式対応と推定されるが良く分からない。Ｓ17では他に分類Ｂの磨消縄文の破片３点及び付帯口縁の土器１点が抽出されている。型式判断は難しいが、安行３ｂ式～３ｃ式の範囲内となろうか。

第５図１～９がＳ12出土土器である。Ｓ12は少し注意が必要な遺構で、報告の図示も少し問題のあるものとなっている。報告書第373図でＳ12の遺物出土状態を示しているが、周辺を含めたＳ70ピット群の平面図示部分ではＳ12が分かりづらくなっている。これは当初Ｓ11と併せて調査記録・遺物取り上げ後、周辺含めての再精査によりＳ70ピット群住居跡を確認したためで、実際にＳ12部分ではＰ４、Ｐ５、Ｓ59等の柱穴が確認されるに至った。このような経緯もあって、Ｓ12自体の覆土や深さ・形態等の記録は明確に示し得ないままとなっており、遺構そのものの把握さえ問題を残している。Ｓ12出土で取上げた遺物では石剣・磨製石斧があり、その出土状態は報告書写真図版三四でも提示している。今回示す土器についても、Ｓ59等を調査する以前の掘り下げ時点で出土した遺物と推定され、当該遺構或いは石剣・磨製石斧との関係を示す可能性があるものと捉えておく。

図化候補として抽出したものでは、以下に示す以外に、Ｂ類とした磨消縄文破片10点、付帯口縁破片１点、紐線文系体部破片１点、無文の鉢口縁部破片１点が確認されている。型式判断可能な資料は少なく感覚的な所見だが、安行３ｂ式が目立つものの、やや時期幅があるようにもみえる。

第５図１はやや高さのある鉢または台付鉢と推定できるもので、接合しない１片では＜Ｋ区中５～６層＞（「中」は中央の意味）の注記がある。沈線→縄紋ＬＲ→無文部ミガキで体部には入組三叉文が描かれる。無文部ミガキは丁寧で、三叉部抉り込みはやや浅めである。口縁直下の横位線等、沈線引き直しまたは下描き線の痕跡も認められる。内面のミガキ丁寧、胎土には石英・白色粒を多く含むほか、雲母もやや多く含んでいる。２は平縁深鉢口縁部破片で、沈線→縄紋ＬＲ→無文部ミガキ・沈線ナゾリが観察される。胎土中の鉱物は少なく丁寧な作りとの印象を受ける。３は鉢または台付鉢と推定されるもので、沈線→粗いミガキが認められる。沈線は浅めで深さ・幅とも不均一となるやや雑な施文と観察される。内面はミガキ、胎土中の鉱物は



第5図　S12・S13, S16, S20 出土土器

少なめである。安行３ｃ式か。4 は薄手の口縁部破片で、沈線による帯状区画内に細かい刺突を充填するものである。粗いナデ調整→浅く細い沈線・円形だが針先状の細かい刺突による文様表現である。5 は透し孔の切取り面があること等から、台付鉢脚部と判断した。細く鋭い沈線で文様が描かれているが、意匠は良く分からない。施文後のミガキは殆ど認められない。内面は脚部としては丁寧なミガキである。胎土中の鉱物は少なく、石英・雲母が少量認められる。上端の透し孔は三叉文状のものとなろうか。調整・施文の手法からは安行３ｃ式対応が推定されるが確実性に乏しい。6 は二山状の突起と口縁からやや下位の位置に付される円形突起が特徴的な破片で、外面は粗製土器に普遍的なヘラナデ状のやや凹凸が残る調整が認められる。内面は比較的丁寧なミガキ、胎土には石英・雲母を少量含む。安行３ｃ式・天神原系と推定できよう。7 は口縁直下の低い隆起帯（付帯部）に角頭状の刺突が廻らされる土器である。この刺突列下位は僅かながら凹帯状に凹んでいる。8 は＜Ｌ区Ｓ 12 №７＞の注記があり、出土状況写真（写真図版三十四 -5）で確認できる土器破片と推定される。形状としては口縁が肥厚する紐線文系の粗製土器に近い。表面ケズリ調整→細い縦～斜め方向の沈線（条線）、内面は比較的丁寧なミガキ。胎土には白色粒・石英・チャート粒・角閃石等鉱物をやや多く含む。9 は付帯口縁の粗製土器である。付帯部の幅がかなり広く確認され、全体形状がかなり大きな土器かもしれない。付帯部はナデ、体部はケズリ～粗いナデ調整で白色粒を多く含む。図示しないが、同一個体の口縁部小片 1 点がある。

第 5 図 10,11 はＳ 13 出土土器である。Ｓ 13 はやや浅く小さい円形土坑でＳ 11 やＳ 70 ピット群と近い位置にある。10 は隆起帯縄文の口縁部破片で、瓢形に近い形態もしくは大波状縁の波底部とみられる。口縁下の隆起帯はかなり高さがあるが、下位の意匠表現の隆起帯は低く無文部との段差はあまり無い。縄紋はＬＲで０段多条の可能性がある。１～２㎜の不透明白色粒を多量に含む。11 は付帯口縁無文土器で 9 同様体部表面は凹凸が残る粗いナデ調整である。内面は木口状工具によるナデでケズリにも近い。胎土には白色粒褐色粒を少量含む。図示以外のＳ 13 で抽出されたものではＢ類磨消縄文破片２点、隆起帯上角頭状刺突がある破片 1 点があり、前者では安行３ｂ式あたりの特徴を示している。

図示しないが、Ｓ 14 出土土器として低い付帯口縁の無文 1 点、分類Ｂの磨消縄文破片２点が確認されている。晩期前半の範囲内となろうか。やや深さのある円形土坑で柱穴となる可能性もあろう。

第 5 図 12，13 がＳ 20 出土土器である。Ｓ 20 はＳ 12 とも連続的で内部にＰ４やＳ 55 を含む不整形の土坑である。Ｓ 12 同様、再精査でこの部分に複数の遺構を認めたことから、Ｓ 20 自体の範囲形態等は不詳となっているが、住居跡入口ピット群の掘り込みと考えることが可能である。ここではＳ 20 出土として扱った資料２点を示す。12 は若干外傾する口縁部に節の細かい縄紋ＬＲが施されているもので、口縁にはＢ突起が付される。13 はやや厚手の深鉢口縁部で、やや浅く細めの沈線→爪形状の刺突→無文部・刺突部ミガキが観察される。器面上位では面が荒れて摩滅している部分も観られる。刺突は縦長長方形状の部分と三角形状の部分とがある。無文帯状のネガ部分が主要意匠表現とも推定されるが、交互充填不徹底で判断難しい。内面やや粗いナデ調整で、胎土中の鉱物は少ない。他にＳ 20 抽出土器では無文土器に突起？が付されている破片 1 点、紐線文系粗製土器に近い形状の無文土器（口縁が隆起帯状となっている）1 点がある。12 は安行３ｂ式に多く観られる形態だが、それ以外は型式判断が難しい。

14 ～ 16 は浅い円形土坑Ｓ 16 出土土器である。14 はＬ区Ｓ 16 №１（口頸部の破片 1 点）＋Ｌ区Ｓ 16 №３の注記が確認できる破片の接合個体で、同一個体の口縁部破片は＜Ｋ区Ｆイ 1-11、５層＞との注記がある。このグリッドはＳ 16 が位置するグリッドで確認面より上位包含層出土となるが、Ｓ 16 近辺精査時出土の可能性もある。調査時の出土状態記録・所見のチェックは行っておらず、当該個体の出土状態は現段階では不

明である。文様は沈線→縄紋ＬＲ→刺突・無文部ミガキで描かれ、内面のミガキは丁寧である。沈線は一部下描き線（或いは引き直しの線）が観られる。口頸部の沈線は浅めだが体部の入組文を描く線はやや幅もあって比較的鋭いが、深さや幅は不均一である。線の交差部は若干抉り込みを入れ三叉的表現としている。頸部の横位縄紋帯中の刺突は若干深く突き刺すような手法。色調は灰黄褐色（10YR3/2）を呈し、胎土には不透明白色粒・灰色粒を多く、石英をやや多く含んでいる。１～3㎜の不透明白色粒も目立つ。安行３ｂ式。15は磨消縄文の破片で、口頸部がくの字状に屈曲する広口壺に近い形状の鉢となろうか。恐らくこの肩部に入組文等が描かれる構成だが、小片故意匠は不明である。沈線→縄紋ＬＲ→丁寧な無文部ミガキ、内面も丁寧なミガキである。後期等の可能性も残るが、一応安行３ｂ式と推定しておく。16の底部破片＜Ｌ区Ｓ 16 №2＞は底部に線状痕・ミガキ痕跡が観られるものである。

第６図にはＳ 18、Ｓ 19、Ｓ 21～23、Ｓ 26出土土器を示す。第６図１～３がＳ 18出土土器、同図４～８がＳ 18・19出土として取り上げられている土器である。Ｓ 18・19はＳ 70ピット群内西側にある土坑で、Ｓ 70ピットのＰ２やＳ 54とも重複する。これらピット調査前にＳ 18・19として土坑の調査を行っており、そこでの遺物出土状態の記録は報告書第374図に示してある。２基の遺構名を付しているが、覆土や形状についての記録が確認できず、２基として良いか、また遺構の詳細について示すことができない。Ｓ 18・19では№1～16までがドット取り上げ遺物として確認されており、とりわけ№15，16は破片数が多量にある。但し殆どが無文の体部破片で多くが同一個体と推定されるがさほど接合もできなかったことから、第６図７の口縁部破片のみ図化した。出土状態図からは比較的狭い範囲に遺物が集中していた様子が窺える。図示した破片以外を含め、型式判断できる資料では、安行３ｂ式期の資料が主体であり、一括的な様相と推定することもできよう。

１は大波状口縁波頂部近くの破片で、拓影左上が波頂部、右側が波底部側である。隆起帯縄文の隆起部はやや低いが無文部との段差は明瞭である。沈線→縄紋ＬＲ→沈線縁を含む無文部ミガキで描かれる。破片下端の隆起帯部上に小さな豚鼻突起の付加が確認される。内面ミガキも丁寧。黒味の強い色調で胎土中の鉱物も少ない。２は、沈線→縄紋ＬＲ→無文部ミガキが観察される体部破片である。択影左端の三叉文はやや深く抉られている。３は口頸部が若干外傾する大洞式系の深鉢または鉢である。沈線→刺突・縄紋ＬＲ→無文部ミガキで羊歯状文等が描かれる。白色粒・灰色粒・雲母等を含み、１～2㎜の鉱物も目立つ。口縁端部も刺突押捺後磨かれている。

４は大波状口縁波頂部突起部分だが、全体に立体感がなく平板な作りである。中央の前面突出突起も低く、突起面上の加飾も中央が浅く凹む形状である。口縁直下で左右に延びる帯状部分の隆起も無く、帯状部を画する沈線も細く浅い。表裏ともミガキ調整が観察され、胎土中の鉱物は少ない。５は鉢と推定される破片で、沈線→縄紋ＬＲ→無文部ミガキが確認される。全体の文様構成は不明だが、入組三叉意匠であろうか。内面に炭化物が付着している。６は屈曲を有する鉢～広口壺状の形態が推測できる体部破片である。上下逆の可能性も考えたが､内面の丁寧なミガキや瘤状突起上面の文様施文（沈線＋縄紋）などから図示の天地と判断した。体部に沈線→縄紋ＬＲ→無文部ミガキで文様が描かれ、全体に丁寧な作りとの印象を受ける。胎土には石英・白色粒・灰色粒をやや多く含んでいる。７は＜Ｓ 18・19 №15＞の注記があるもので、既述のように同一個体の体部片は多いものの図示していない。体部の半径は14～15㎝程度となる。外面ナデ、内面ミガキ調整で胎土には石英・白色粒を少量含む。８は二段の付帯口縁となる無文土器である。全体に薄手の作りで、折返し状の付帯部分もさほど厚くはなっていない。内外面粗いナデ調整で、胎土には白色粒・灰色粒を多く含む。

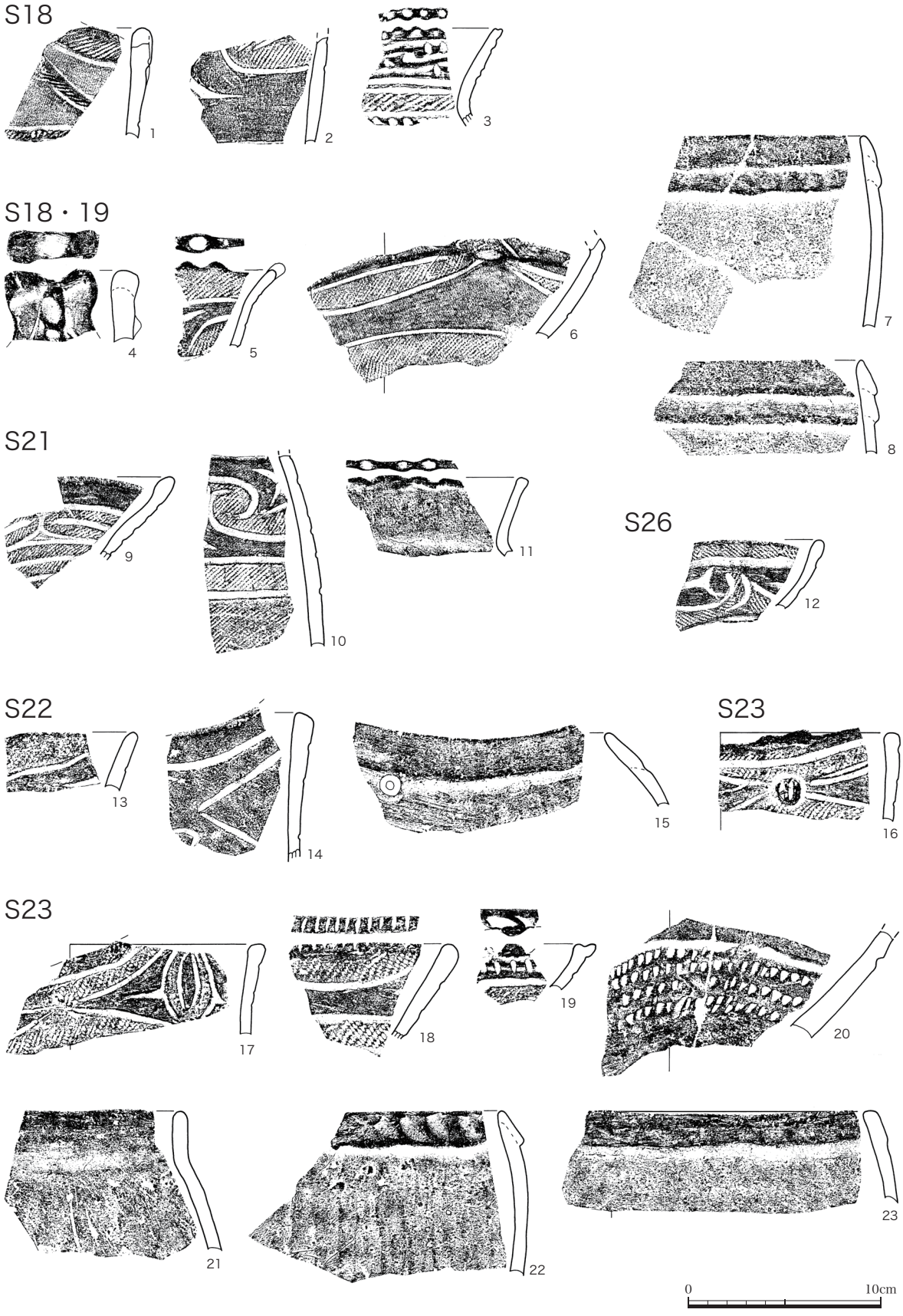
第６図９～11はＳ 21出土土器である。Ｓ 21は報告書第376図に遺構図を示している浅い円形土坑（半

分はサブトレンチで不明）で、遺物の詳細な出土状態は不詳である。9 は鉢・皿状の形態が推定される口縁部破片で、沈線→縄紋ＬＲ→無文部ミガキが観察される。沈線はやや浅めで立体的浮彫的な表現ではない。内面は丁寧なミガキ調整。大洞Ｃ２式と推定されるが、同式の典型的な文様ではない。10 は深鉢の頸部～体部にかけての横帯文様部分の破片で、入組文及び三叉文の一部が確認される。沈線→縄紋ＬＲ→丁寧な無文部ミガキで内面の入念なミガキも含め丁寧な作りの土器と観察される。石英等の鉱物粒も少ない。大洞Ｂ２式対応となろうか。11 は頸部屈曲の無文深鉢で、無文土器ではあるものの薄手で丁寧な作りの印象を受ける。口縁端部の浅めの押捺により外面側に粘土はみ出しが生じている。内外面とも比較的丁寧なナデ調整。鉱物少なく硬質な感がある。その他の抽出土器ではＢ類とした磨消縄文の破片６点、頸部に縄紋が施される壺状の口縁部破片 1 点、沈線または刺突列のみの破片＜分類Ａ＞２点がある。型式判断可能なものは少ないが、晩期初頭～中葉までやや幅があるように思える。

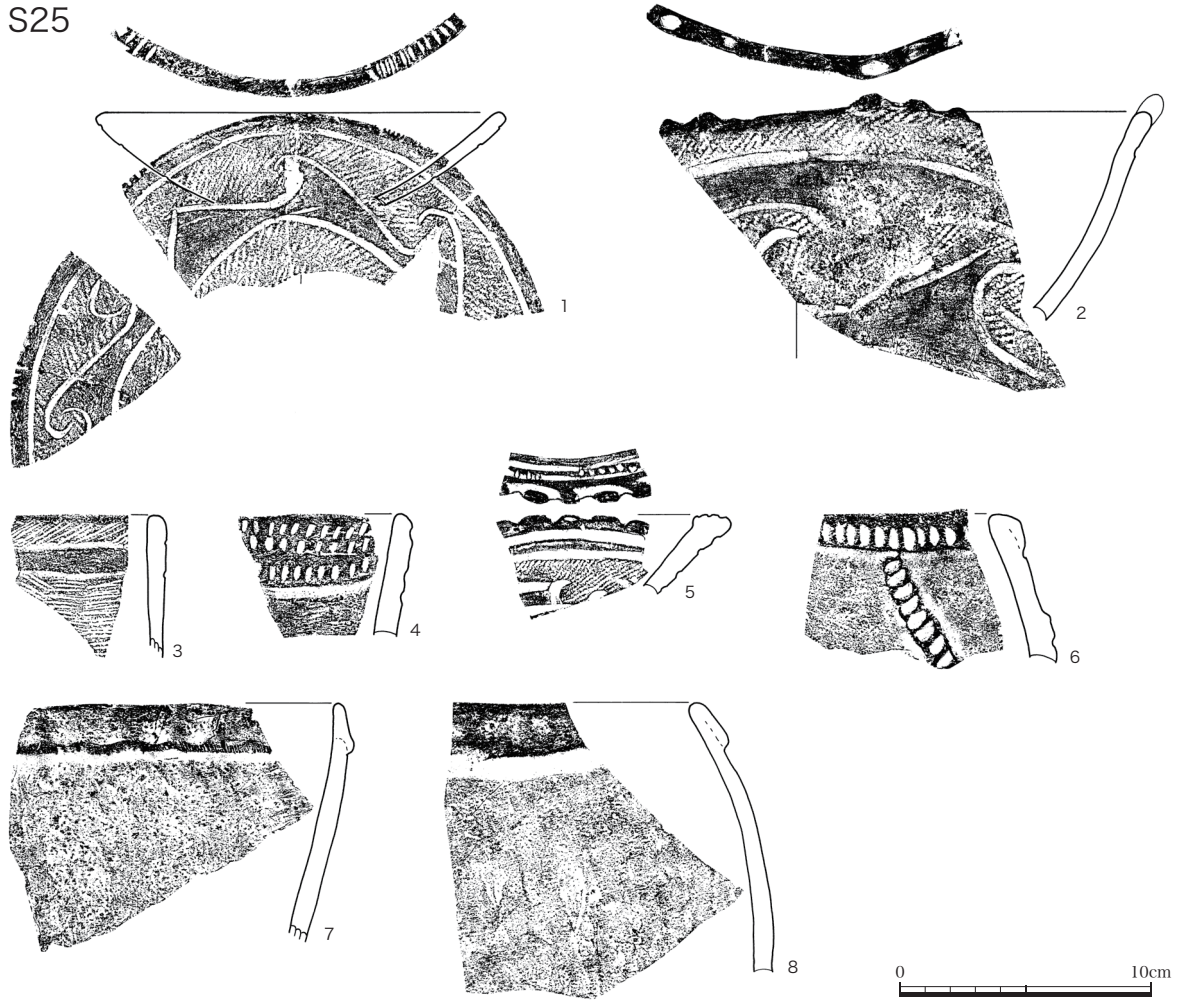
Ｓ 26 出土の第 6 図 12 は安行系の鉢で沈線→縄紋ＲＬ→無文部ミガキが観察される。沈線はやや浅めの施文で、三叉部の抉りも観られない。内面のミガキ調整は丁寧で、胎土中の鉱物も少ない。口縁の弧と下端とで若干の歪みがあり、角底等イレギュラーな形態の可能性もある。安行３ｂ式か。

13 ～ 15 はＳ 22 出土土器である。13 は浅い沈線→縄紋ＬＲ？→ミガキが観察されるもので、縄紋も浅い施紋である。内面やや粗いミガキ調整。14 は「姥山Ⅲ式」と言える土器で、やや粗いナデ調整の上に浅い沈線で文様が描かれる。施文後の調整は若干のミガキが観られるのみである。内面もやや粗いナデ～ミガキ調整、胎土には白色粒を少量含む。15 は強く内傾する付帯口縁深鉢で、体部ケズリ～ナデ、付帯部及び内面ナデ調整が観察される。白色粒をやや少量含む。かなり大形の土器と推定される割には薄手である。破片左端近くに外面から穿たれる補修孔がある。

16 ～ 23 がＳ 23 出土土器である。16 は製図後に同図 17 と同一個体であることが確認されたものである。径はより遺存部の多い 17 の口径 19.6㎝と修正しておく。大波状口縁深鉢で 16 が波底部、17 が波頂部から波底部にかけての破片である。17 の破片右上方に山形状の突起が配されると推定される。口縁直下は若干の隆起帯状だが、他は縄紋部無文部とも平坦となっている。沈線→縄紋ＬＲ→無文部ミガキだが、縄の施紋、ミガキともやや粗い感を受ける。沈線もやや浅めで三叉部の抉りもわずかである。波底部側の文様交点部に瘤の剥落が観察され、16 で確認されるような瘤が付されていたものと推測できる。胎土には不透明白色粒を多量に含む。18 は鉢と推定される土器で、沈線→縄紋ＬＲ→無文部ミガキが観察される。内面丁寧なミガキ調整、口縁端部にやや鋭角で細長い刻みが付されている。胎土には細かい白色粒を多量に含む。沈線や縄の特徴は前浦式もしくは前浦式直前型式に近いようにも観察される。19 は大洞Ｃ１式の鉢と推定できる口縁部資料で、沈線→縄紋ＬＲ・刺突→無文部ミガキが確認される。口縁端部の装飾も含め、大洞式系特有の浮彫的手法と観察できる。胎土中の鉱物も少ない。20 は台付鉢鉢部分の下端近くと推定される土器で、粗い調整の上に爪形状の刻みが三～四列施されている。太めの横位沈線より上位無文部はミガキが加えられている。内面はミガキ調整、胎土には雲母・石英をやや多く、白色粒を少量含んでいる。質感は安行３ｃ式あたりの資料と近いが文様構成不明で型式比定は困難である。21 ～ 23 は無文土器。21 は口縁が直立する深鉢口縁部で、屈曲より下位の体部は縦方向のケズリ調整、上位の口頸部は横方向ナデ調整である。内面比較的丁寧なナデ～粗いミガキ、胎土には白色粒・黒色粒をやや多く含む。22 は付帯部下端がやや厚くなる作りで、体部外面は縦方向に線状痕が残るナデ調整、内面は平滑となる丁寧なナデ調整、付帯部は指頭圧痕が残る調整である。この種の土器としては鉱物が少なく白色粒を少量含む程度である。23 は付帯口縁の深鉢だが体部との厚みの差はあまりなく、付帯部下端の境界部分が沈線～凹線状に撫でられることで付帯部が強調されている。



第6図　S18・S19, S21～S23, S26 出土土器

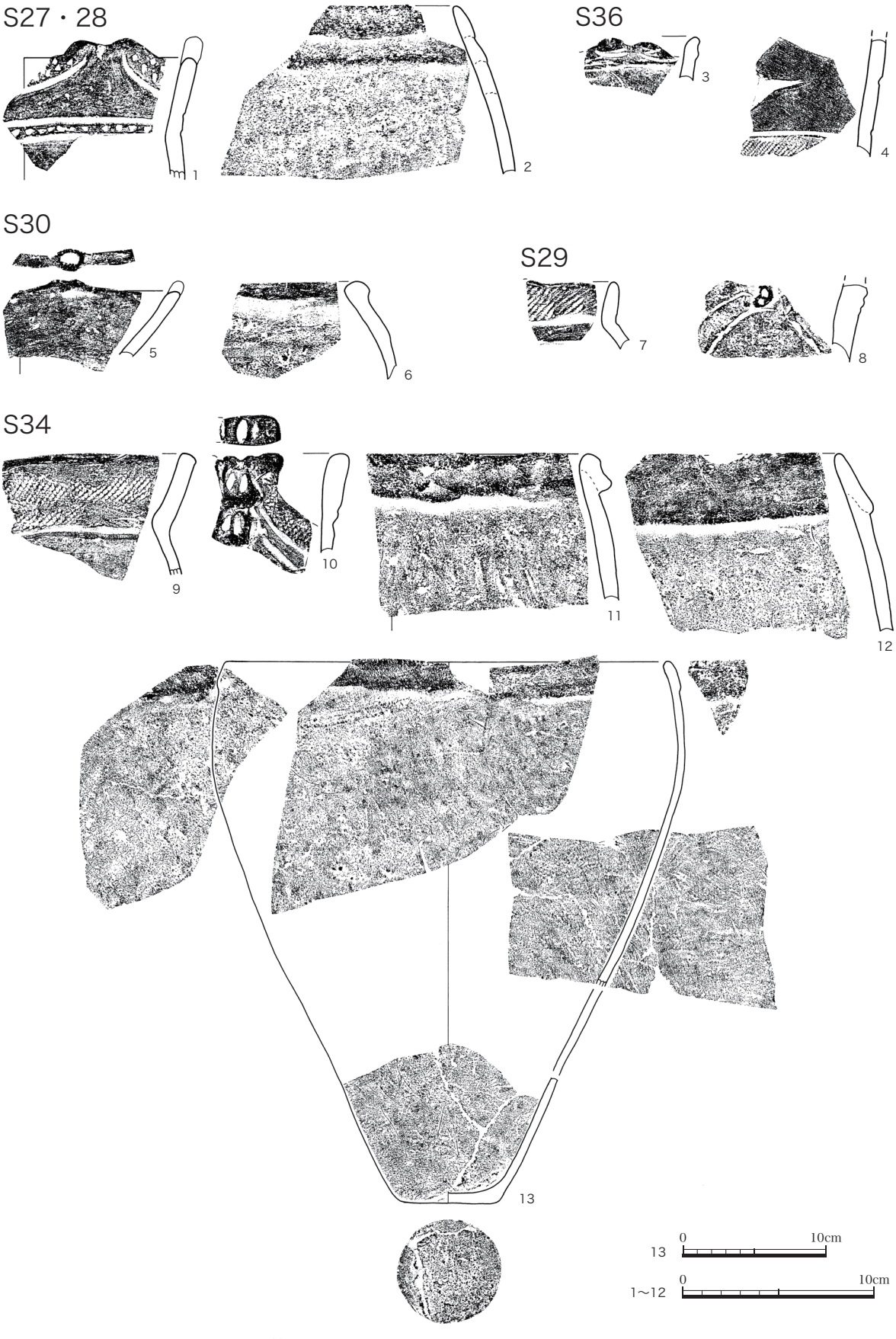


第 7 図　S 25 出土土器

体部ケズリ～粗いナデ、付帯部は凹凸残るナデだが、上端～口縁端部にかけてはやや丁寧に撫でられている。外面は燈色基調だが、内面はにぶい黄燈色を呈し、胎土には白色粒及び石英を多量に含む。

第 7 図には S 25 出土土器を示す。S 25 は浅い円形土坑で、遺物が多く出土している。但し出土状態の記録は確認できない。

1 は小形の鉢だが、択影中央線より右側の破片が S 25 出土である以外 F ア 5-20 または F イ 5-20 グリッド出土資料である。沈線→縄紋 L R（0 段多条？）→無文部ミガキ、内面ミガキ調整が観察される。沈線はやや鋭角細めで、下描き線が一部残っている。口縁端部の刻みも鋭角で細い。文様は原則的に S 字入組の連続だが､一部斜行線のままとなっている部分がある。胎土中の鉱物は少ない。色調は 7.5YR4/2 灰褐色を呈する。2 は安行系の鉢または台付鉢で、やや大柄な入組文様が描かれる。沈線→縄紋 L R →丁寧な無文部ミガキで、口縁には三連？となる B 突起状の突起が付される。内面のミガキも丁寧である。外面ほぼ全体及び内面広い範囲に炭化物が付着しており、特に表面の破片中央では文様を覆うように厚く付いている。沈線はやや浅く、施文後の縁まで及ぶミガキにより文様線がやや不鮮明になっている。色調は黒味が強く胎土中の鉱物は少ない。3 は細密沈線の深鉢口縁部で、沈線→細密沈線→ミガキが観察される。明褐色～燈色を呈し、胎土中の鉱物は少ない。細密沈線はやや緻密さに欠ける施文で、2 本並行の部分と 1 本描きのように見えるところとが



第８図　S27～S30, S34, S36 出土土器

ある。 4 は深鉢口縁部資料で、口縁直下の区画内に爪形状の刺突が充填される。刺突はやや深めで施文後に若干のナデ～ミガキも加えられる。無文部のミガキも丁寧さは観られず、全体に粗い作りのように捉えられる。内面ナデ調整、胎土には細かい白色粒をやや多く含む。 5 は大洞Ｃ 1 式の鉢である。やや浅く幅広の沈線→縄紋Ｌ Ｒ→無文部ミガキが観察される。比較的丁寧な施文だが、無文部彫去の浮彫表現とまでは言い得ない。口縁端部や内面も丁寧なミガキ調整、胎土には白色粒をやや少量含む。 6 は貼付紐線文系の資料である。角頭状の口縁形態等、典型的な紐線文系との判断は躊躇させる。内外面ともやや粗いナデ調整。紐線上の刻み加飾後も若干撫でられている。胎土中の白色粒・灰色粒は多く、石英・雲母もやや多く含んでいる。 7 は付帯口縁の深鉢で、図よりやや直立する傾きかもしれない。体部外面は凹凸の残る粗いナデ、内面ナデ、付帯上指頭押圧、付帯の下端の右側には細く浅い刻み線状痕が確認されるが、意匠表現か調整痕跡かは不明である。８は付帯口縁の粗製土器で、内外面とも比較的平滑となるヘラ状工具によるナデ調整が観られる。

Ｓ 25 は報告書第 377,378 図に復元個体を含む複数個体を掲載しており、安行３ｂ式期の良好なまとまりと言えそうである。他にも多数の無文土器と共に、磨消縄文のある破片や付帯口縁深鉢の破片等も多く認められる。これらの中には第 377,378 図に示した資料と同一個体の資料も確認されている。磨消縄文の破片では安行３ｂ式辺りと推定できるものが目立っている点は付記しておく。

第 8 図にはＳ 27 ～ 30、Ｓ 34、36 出土土器を示す。1,2 はＳ 27・28 との注記がある資料だが、Ｓ 28 として記録した遺構は無く、不明な点が残る。Ｓ 27 自体はＳ 70 ピット群内にある深さ 19㎝のピットである。1 は小形の深鉢と推定され、沈線→刺突→ミガキ調整が観察される。刺突時の粘土はみ出し等はほぼ取り除かれている。無文部はより丁寧に磨かれており、刺突帯状部との対比効果が認められる。口縁端部～内面のミガキも丁寧で細いヘラ状工具の調整痕跡も残される。胎土には石英・白色粒をやや多く含み、色調は燈色基調である。沈線はやや太めで、安行３ｃ式や前浦式直前型式の特徴に類する。2 は付帯口縁深鉢の口縁部だが、付帯二段目と体部との境・段差は低い。器面の荒れ・摩滅が著しいが内外面ともナデ調整のようである。胎土には径 1㎜程度の白色粒を多く含んでいる。

3,4 はＳ 36 出土土器である。Ｓ 36 はＳ 70 ピット群内にある遺構だが、2 基の遺構に対してＳ 36 と発番されており、いずれからの出土かは不明である。3 は口縁にＢ突起が付される小片。口縁直下に狭い付帯状の部分が作出されているようにも見えるが、全周するかは不明である。外面体部は比較的丁寧なミガキ、内面は粗いミガキ調整である。破片左側に浅い沈線（弧線）が描かれているが、文様意匠は不明である。大洞Ｃ 1 式併行ぐらいか。 4 は、やや大形の深鉢頸部～体部破片で、沈線→縄紋Ｌ Ｒ→無文部ミガキが観察される。三叉部の抉りはかなり深い。内面はやや粗い調整。安行３ａ式か。

第 8 図 5,6 はＳ 30 出土土器である。このＳ 30 もＳ 70 ピット群内にあるピットである。5 は無文の鉢で口縁端部に恐らく二個一対の突起が付される。突起頂部は凹点状に凹む。外面ナデ～ミガキ調整、内面ミガキ調整である。胎土には石英を多く含んでいる。6 は無文の深鉢で外面粗いナデ調整、内面ナデ調整が観察される。外面は指頭状のやや幅広の調整痕跡が認められる。白色粒及び石英を多く含む。同一個体と推定される体部破片が多数あるが図化し得なかった。このＳ 30 出土土器では他に安行２式または瘤付系の小片が出土しているがこれも図示していない。なお図化していないが、Ｓ 33 では無文鉢小片（晩期前半か）1 点、Ｓ 35 では体部に円形浮文が付される破片 1 点、大洞Ｃ 1 式に類する文様のある小片 1 点を確認している。

Ｓ 29 として第 8 図 7,8 の 2 点を示す。Ｓ 29 もＳ 70 ピット群内のピットである。他に認められた破片では磨消縄文の小片や無文＋隆帯の付される破片がある。7 は、口頸部が若干外傾し以下に主要文様施文部が配される深鉢口縁部か。破片左端は上方に若干突出する突起で、二連のＢ突起となろうか。沈線→縄紋Ｌ Ｒ→

無文部ミガキ、内面もミガキ調整が観察される。雲母及び白色粒をやや多く含んでいる。８は粗い調整の上に沈線及び突起が付されるもので、沈線施文後も若干ミガキ調整が為されている。内面も粗いナデ調整。文様モチーフは不明で、上下逆の可能性も残る。厚手で、質感は安行３ｃ式辺りの土器に近い。

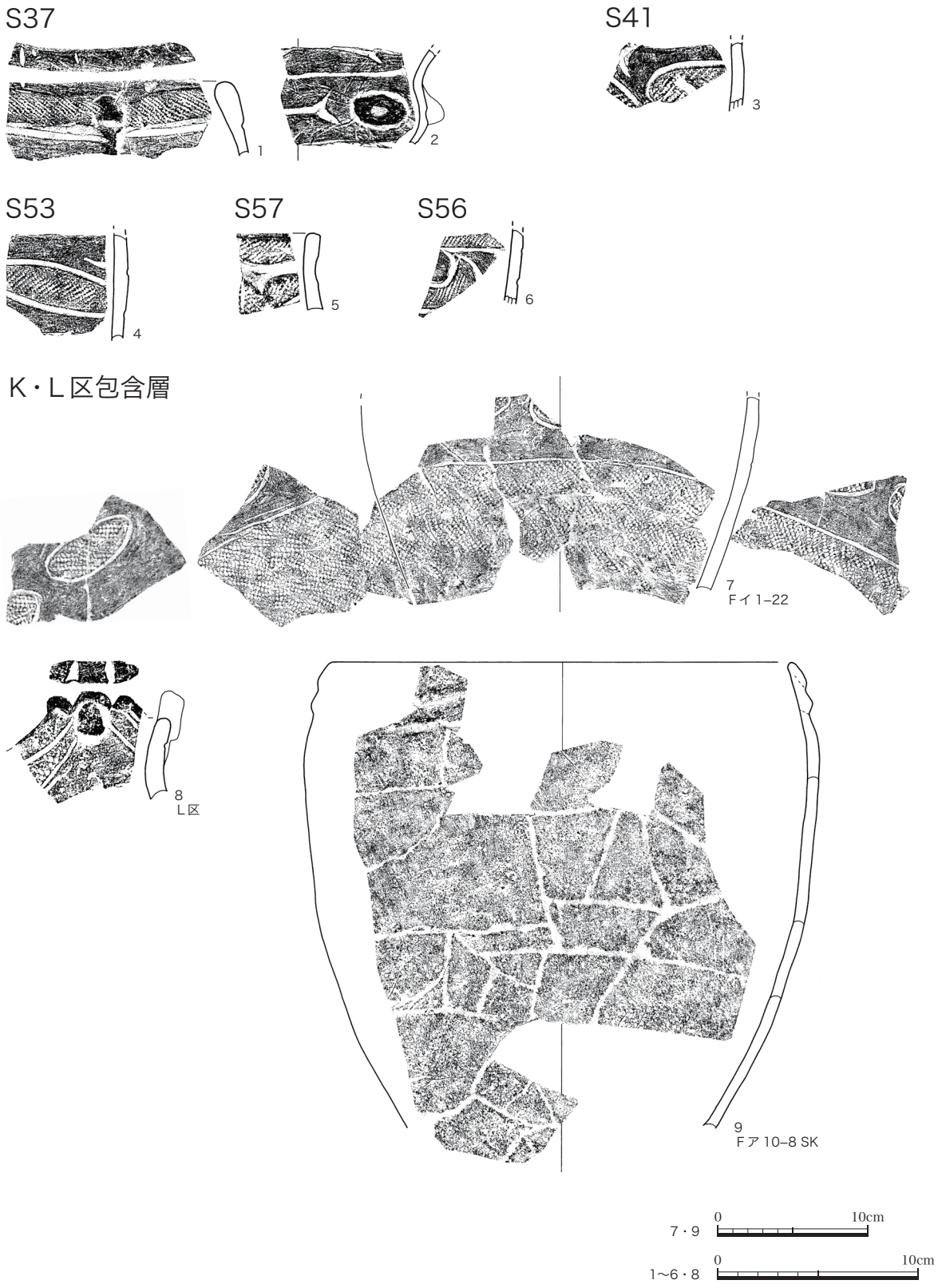
９～13がＳ 34出土土器である。Ｓ 34は明確な記録を現時点で確認できず、不明な部分が多い遺構である。Ｓ１住居跡に近接しサブトレンチ内の土器集中部に対して遺構番号が付されているようであり、或いは13に示した土器をもって埋設土器遺構との想定をしていた可能性も残る。９は外傾頸部縄紋帯の深鉢で、屈曲部より下位の無文部は良く磨かれている。口頸部の縄紋ＬＲはケズリ～ナデ調整の上に二段に亘って施されている。口縁端部～内面も丁寧に磨かれている。胎土には細かい雲母を少量含む。10は、大波状口縁深鉢の波頂部で、隆起帯縄紋部はやや厚く無文部とは比較的明瞭な段差を作っている。沈線→やや粗い縄紋ＬＲ→無文部ミガキの順で描かれる。内部に縦方向の刻みが加えられる豚鼻突起はやや大きめで下位が厚く垂れた特徴を有している。突起上端の刻みも幅広く深めの刺突状を呈する。内面も丁寧なミガキ、鉱物は少なめである。11は、付帯部が厚く作られる深鉢口縁で、外面ケズリ～粗いナデ、内面もやや粗いナデ調整である。付帯部は指頭押圧状の痕跡が残り平滑ではない。胎土には石英・白色粒を多量に含み色調はやや黒味が強い。12は付帯口縁深鉢の口縁部だが、口縁弧の丸味が無く、かなり大きな土器となりそうである。体部は凹凸が残る粗いナデ、内面のナデもやや粗く、面的にも輪積みの痕跡が一部確認できる。付帯部は比較的丁寧に撫でられている。胎土には白色粒及び雲母を少量含む。13は、付帯口縁深鉢の破片数点から器形復原したものである。図示以外にも破片数点を確認しているが、接合は思わしくなく、特に体部下方と推定できる破片は認められない。大きさの割には薄手で、色調は7.5YR6/6燈色基調（場所による濃淡あり）で、胎土には白色粒・石英・灰色粒を多量に含む。外面はやや凹凸の残る粗い調整で、ケズリ～ナデ調整、内面は比較的平滑となるナデ調整、底部はケズリ調整である。付帯部はさほど厚く作られていない。

第９図にはＳ 37,S41,S53,S57,S60出土土器及び包含層出土土器を示す。

1,2がＳ 37出土資料だが、Ｓ 37とした遺構の記録がなく、整理報告時には欠番扱いとした。従ってここで示す資料も包含層出土資料とすべきだが、整理時のチェックも不十分な部分が残っており、とりあえずここではＳ 37出土資料として提示しておく。１は内傾する平縁深鉢口縁部で、隆起帯部分はかなり厚く作られ、無文部とは明瞭な段差を有する。沈線・瘤貼付→縄紋ＲＬ→無文部ミガキが観察される。内面はやや丁寧なナデ調整である。胎土には白色粒をやや多く含む。２は鉢または台付鉢の体部破片と推定されるものである。薄手で丁寧な作りの印象を受ける。瘤貼付・沈線→ミガキで、瘤の上位や周囲等も含め細かいヘラ状工具によるミガキ痕跡が確認できる。沈線は明瞭だがやや浅めで三叉部も深く抉られてはいない。屈曲より上位も破損で不鮮明だが三叉状の意匠表現のようである。内面も丁寧なミガキで、内面中位～下方には炭化物がやや厚く付着している。胎土中の鉱物は少なく色調は黒味が強い（7.5YR3/1）。他のＳ 37抽出資料では、磨消縄文の破片１点（安行３ａ式～同３ｂ式）がある。

３はＳ 41出土土器であるが、このＳ 41も遺構図の記録が確認できず、現時点で欠番扱いの遺構である。３は入組文が描かれる安行系深鉢体部破片で、上下逆の可能性もある。沈線→縄紋ＬＲ→無文部丁寧なミガキが観察される。破片左上部分はやや深い抉りによる三叉文で、無文部の空間に描かれるものであろうか。黒味の強い色調で丁寧な作りの印象を受ける。胎土中の鉱物は少ない。このＳ 41出土で抽出されたものでは、他に安行３ａ～３ｂ式辺りと推定できる破片数点が認められている。

４はＳ 53出土土器である。このＳ 53及び５に示すＳ 57、６で示すＳ 60いずれもＳ 70ピット群内にある遺構である。４は安行系深鉢の体部破片で、破片右上の線は三叉文の一部のようである。沈線→縄紋ＬＲ→



第９図　S37, S41, S53, S57, S60, K・L区出土土器

無文部ミガキで、沈線はやや細く鋭角な施文である。胎土には雲母を少量含み色調は黒褐色を呈する。内面は丁寧なナデ調整。５はＳ 57 出土の口縁部破片で、図より内傾する可能性もある。幅広で深めの沈線→縄紋ＬＲで、沈線内（凹部）はナゾリまたは反復施文状の施文であることから、浮彫状に近い表出となっている。口縁端部～内面は丁寧に磨かれている。文様構成不明だが、施文の特徴は大洞Ｃ１式や前浦式直前型式と近いように見受けられる。６は安行系深鉢の頸部～体部破片か。上下逆の可能性もある。沈線→縄紋ＬＲ→丁寧な無文部ミガキで、内面はナデ～ミガキ調整である。色調はにぶい燈色で胎土中の鉱物は少ない。沈線はやや浅い施文で、ミガキや縄紋の特徴・質感等からは安行３ａ式や大洞Ｂ２式辺りの土器と推定される。Ｓ 60 では他に若干内彎する無文の口縁部破片１点がある。

なお図示し得なかった資料として、Ｓ 51 では磨消縄文の破片１点（安行３ｂ式辺りか）、Ｓ 55 では縄紋ＬＲ（０段多条？）が施される体部破片１点、Ｓ 56 では付帯口縁深鉢の小片１点、Ｓ 58 では網目状撚糸紋の体部破片１点があり、これらはいずれもＳ 70 ピット群内の遺構出土である。

第９図７～９はＫＬ区包含層出土土器である。７は深鉢の体部下方の破片群を資料化したものだが、図版作成後報告書第 377 図２と同一個体であることが判明した。この土器は５単位の波状縁深鉢の復原個体である。第９図７の左端に示した破片の右側が、報告書第 377 図２で示した資料の左下部分と接合する。つまり今回示した包含層Ｆイ 1-22 グリッド出土資料部分はＳ 25 出土資料である体部の楕円文を配する帯状部及びその下位の縄紋部の破片群ということになる。いずれ機会をみて合成図を示すこととしたい。文様は沈線→縄紋ＲＬ→無文部ミガキで描かれる。胎土には径１～３㎜の白色粒及び石英をやや多く含む。内面はやや粗いミガキ調整。外面の縄紋施紋部は器面の凹凸が残る粗いナデ調整の上に施されている。８は包含層グリッド出土資料（Ｌ区東端５層との注記）で、図示していない同一破片１点（Ｋ区Ｆイ 1-17 ５層）がある。沈線・瘤貼付→粗い縄紋ＬＲ→無文部ミガキで、波頂部には深く鋭角な抉り状刻みが加えられる。沈線はやや細く浅い施文。内面はミガキ調整である。胎土中に白色粒を多く含む。文様構成からは安行３ｂ式波状縁深鉢と推定されるが、瘤や質感等より新しい特徴も窺える。９はＦア 10-8 ＳＫ№１またはＳＫ５層№１と注記されている破片複数が接合し器形復元が可能となったもので、口縁は一部のみの遺存である。かなり器面が荒れているが、内外面ともナデ調整と観察される。胎土には石英・白色粒を少量含み、色調は明褐色を呈する。比較的大形で遺存部の多い土器であり、注記からは遺構出土の可能性もあるが、出土状態の記録を現時点では確認していない。

小結

まず、Ⅱの土坑・ピット出土土器として示した中に、Ｓ 70 ピット群扱いで住居跡を推定した遺構帰属資料があるのでこれについて補足する。即ち、Ｓ 20（第５図 12,13）、Ｓ 18,19（第６図１～８）、Ｓ 27,28, Ｓ 29, Ｓ 30, Ｓ 36（第８図１～８）、Ｓ 53, Ｓ 57, Ｓ 60（第９図４～６）が住居の入口部分を主とするＳ 70 ピット群に帰属する。これらは住居跡の時期判断の資料ともなり得るものであるが、安行３ａ式～同３ｃ式期まで認められ、時期判断を難しくさせている。住居跡の時期について、出土土器の割合としては安行３ｂ式が目立ってはいるものの､報告で記した所見通り下限をとって安行３ｃ式期としておく｡なお図示していないが、＜Ｓ 20・37・55・56・59＞との注記がある出土土器が１点あり、口縁端部にＢ突起状及び端部に周回する刻み列が確認される無文土器である。Ｓ 70 入口ピット群に関わる部分からの出土と推定されるが、不詳の遺構名Ｓ 37 が入っていることもあり、記録或いは取上げ時のミスも関わっているかもしれない。型式判断難しいが晩期前半と推定できる点参考程度に付記しておく。

本来ここで幾つかの注目すべき資料等について検討を加えるべきであるが、未報告資料も未だ多く残っていることもあり、後日を期したい。次年度以降、追加報告や検討の機会を再度持ちたく考えている。特にＫＬ区の包含層出土資料やM区等で良好な資料が多く残されている。また、既報告分も含めた個別の資料についての型式論的な位置づけや編年的な問題に加え、遺跡全体の様相、異系統土器群の共存問題等、土器に関わる検討課題は多く残されているが、これらについても今後少しずつ検討を加えることとしたい。

足利市あがた駅南遺跡の整理作業に際しては、埋文センターの職員・補助員より多くのご協力を得ました。また本稿の作成についてもご理解とご協力を得ることができました。皆様に深く感謝申し上げます。

［文献］

江原　英・谷中　隆 2020『あがた駅南遺跡　栃木県埋蔵文化財調査報告第 396 集』栃木県教育委員会・公益財団法人とちぎ未来づくり財団

研究紀要　第29号

発　行　　公益財団法人 とちぎ未来づくり財団
埋蔵文化財センター
〒329-0418
栃木県下野市紫 474 番地
ＴＥＬ　0285（44）8441（代表）
ＦＡＸ　0285（43）1972
ＨＰ：http://www.maibun.or.jp

発行日　　令和３（2021）年３月30日発行

印　刷　　株式会社大塚カラー